

# Nagoya Urban Institute News Letter ニュースレター

名古屋都市センター

2014.12 vol.102



高校生と子供たちのミツバチ教室

【特集】

## 環境首都をめざす名古屋で 「ESD ユネスコ世界会議」

地域に広がる持続可能なまちづくりの学び合い

### Contents

【特集】「環境首都をめざす名古屋で 「ESD ユネスコ世界会議」…… 地域に広がる持続可能なまちづくりの学び合い	1~3
PERSON	4
まちづくり活動助成団体紹介	5
名古屋都市センター研究成果	6~7
まちづくり来ぶらり	8
なごやのまち今昔	9
活動報告	10
お知らせ	11~12



名古屋国際会議場で開かれた「ESD ユネスコ世界会議」(左2点)と各地で進められているESDの取り組み

## 「愛・地球博」「COP10」に続く国際イベント

持続可能な社会のための教育をテーマに掲げた「ESD ユネスコ世界会議」が、愛知県・名古屋市と岡山市で開催されました。主催はユネスコと日本政府です。全体のとりまとめ会合の舞台は名古屋国際会議場。ユネスコに加盟する150の国と地域から76人の官僚級のほか、NGOや企業の代表、若者ら約1000人が参加し、11月10日から12日にかけて熱気の高まった議論やアピールを繰り返しました。

自然の叡智をテーマにした2005年の「愛・地球博」。生物多様性の保全と持続可能な利用をめざす2010年の生物多様性条約第10回締約国会議「COP10」。これに続く国際的なビッグイベントの開催は、環境首都をめざす愛知県・名古屋市にとって、極めて重要な情報発信と交流の機会となりました。またこれと連動し、学校や地域などで持続可能な社会をめざす学び合いの取り組みが広がりをみせ、明日のまちづくりへの大きな可能性ともなっています。ESDの歩みと意義、地域での取り組みを検証してみました。



## 【特集】 環境首都をめざす名古屋で「ESD ユネスコ世界会議」

### ESD の重要性と促進を訴える「あいち・なごや宣言」

名古屋で開かれた「ESD ユネスコ世界会議」は、2002年の国連総会で決議された「国連 ESD の10年」（2005～2014年）の集大成であり、2015年以降の ESD 実践に向けた新しいスタートと位置付けられています。これまで世界は経済開発優先のなかで、環境、貧困、人権、資源など様々な問題を抱えてきました。現状のままでは社会の持続が困難であり、「持続可能な社会をつくる人材育成」の緊急性が認識されるようになりました。そのための教育を「ESD」（= Education for Sustainable Development）と呼びます。「国連 ESD の10年」はそれを実践する国際的な取り組みであり、日本の提唱から生まれました。

名古屋で開かれた世界会議では10年の成果を検証。諸問題の解決をめざす学び合いについて議論を重ね、ESD の重要性と促進を訴える「あいち・なごや宣言」を採択しました。また、優れた実績を称える「ユネスコ日本 ESD 賞」も創設されました。

#### 「あいち・なごや宣言」の骨子

- 「国連 ESD の10年」の実績や優れた取り組みを評価する。
- 気候変動、生物多様性、持続可能な経済活動等に ESD が重要であることを再確認する。
- 国際的な課題のつながりを自覚する地球市民育成に対し ESD の可能性を重視する。
- 先進国と途上国の貧困撲滅、不平等縮小、環境保護、経済成長などに取り組む。
- ESD の実践には、普遍的原則だけでなく、地域、国、世界の文脈を考慮すべき。
- 「ユネスコ日本 ESD 賞」の創設を評価する。

- 2015年以降の ESD 推進のためにユネスコが採択した行動指針「グローバル・アクション・プログラム」（GAP）が示す5つの優先行動分野（※）に焦点を合わせ、学習を強化する。

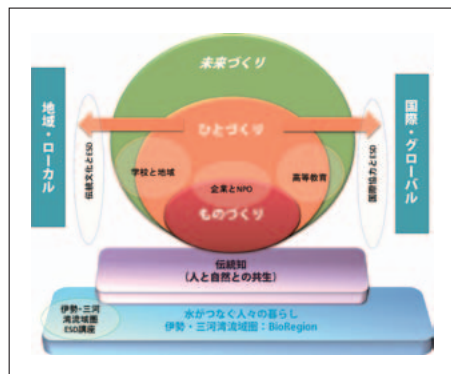
※ GAP が示す5つの優先行動分野

1. 政策的支援。
2. 教育・トレーニングの場に持続可能性の概念を取り入れる。
3. 教員やトレーナーの能力向上。
4. ユースの役割支援と動員。
5. 地域コミュニティや地方政府に ESD プログラム策定を推奨。

## ■ 中部 ESD 拠点 流域圏という視点で ESD モデルを提案

愛知・名古屋を含む広いエリアで ESD の推進母体として重要な役割を担っているのが、2007年に設立された「中部 ESD 拠点」です。教育機関、NPO、企業、行政機関など約80団体からなるネットワークで、国連大学が ESD 推進拠点として認定している世界約130カ所の中の一つです。

中部 ESD 拠点は、伊勢湾と三河湾に注ぎ込む河川の流域全体を「伊勢・三河湾流域圏」と呼び、活動対象地域としています。愛知、岐阜、三重の3県をカバーしていますが、活動対象地域を行政単位ではなく、流域圏という自然環境の視点で定めているのが特徴です。そこで地域の持続可能な発展を妨げる自然、経済、社会の諸課題を明らかにし、それらの解決に向けた学び合いや人材育成を行っています。



ESD 推進の「中部モデル」のイメージ図

2012年からは「中部 ESD 拠点2014年プロジェクト」として、愛知、岐阜、三重の3県を流れる11河川と愛知用水の流域で教育機関や活動団体と連携し、「流域圏 ESD 講座」を実施。これまでに約100回の実績を重ねてきました。また先般の世界会議

では、流域圏での「ものづくり・ひとづくり・未来づくり」のあり方を「流域圏 ESD モデル」として提案しています。

2015年以降は同モデルの普及と発展をめざし、ユネスコの「グローバル・アクション・プログラム」に以下の方針で参加していく計画です。①流域圏単位の ESD 推進のための政策的支援。②教育・トレーニングの場での流域圏モデル導入推進。③ものづくり・人づくり・未来づくり実現のための教員・トレーナーの能力向上。④流域圏の持続可能性を構想できるユースの役割支援と動員。⑤コミュニティレベルで流域圏 ESD モデルを基礎としたプログラム策定推進。

## ■ エコプラットフォーム東海 「とことんトーク」講座や 「とことんエコなまちづくり」提言などを実施

質の高い講座や、環境教育の人材育成で着実な成果を積み重ねてきた「エコプラットフォーム東海」は2002年、東海地域の学識者、NPO、市民、行政関係者らが「環境教育のプラットフォーム」づくりを目的に設立した団体です。その際、トヨタの環境活動助成プログラムに応募。活動趣旨が認められ助成も受けています。

主な活動としては、環境教育をテーマにした出会いと交流の場づくり、プログラム開発と実施、環境教育を担う人材の育成と紹介などです。また、なごや環境大学の、食、水、原子力、生物多様性などをテーマにした講座を企画・運営。2011年からは低炭素都市づくり、ESD 等をテーマに徹底討論する講座「とことんトーク」を続け、2014年、その成果を提言書「とことん



エコプラットフォーム東海による「とことんトーク」

エコなまちづくり」として名古屋市に提出しました。

また「愛・地球博」の地球市民村、今回の「ESD ユネスコ世界会議」の共催イベントにブース出展。環境教育をテーマにした展示やプログラムを実施しています。さらに世界会議終了後も「とことんトーク：ESD ユネスコ世界会議を終えて」と題する講座を実施。愛・地球博、COP10、ESD ユネスコ世界会議の開催と続いた環境先進都市名古屋は、東海・中部の中心として、今後どのようなESDを推進して行くべきかを徹底討論しました。

## ■ 愛知商業高校「ユネスコクラブ」 ミツバチプロジェクトで 持続可能な社会づくりを学ぶ

名古屋市東区にある愛知商業高校のキャンパス周辺は、「文化のみち」と呼ばれる歴史的な景観地区です。そこで養蜂を行い、ハチミツを使った商品開発などで地域活性化をめざすマーケティング研究講座「ミツバチプロジェクト」が、2011年にスタートしました。



愛知商業高校の生徒と陸前高田の高校生がいっしょに販売活動

生徒たちは校舎屋上でミツバチを育て、生態を観察します。さらにハチミツを地域アピールのブランド商品として「徳川はちみつ」と名付け、販売活動にも踏み込みました。2013年には、ミツバチプロジェクトがユネスコスクールに登録され、マーケティング研究講座は2014年、「ユネスコクラブ」に名称変更。部活動として活動の幅をさらに広げます。

大震災の被災地、陸前高田の特産品「米崎りんご」と「徳川はちみつ」を使ったアイスクリーム「希望のはちみつりんご」を名古屋のメーカーと共同開発。売上金の一部を支援金として被災地に届けています。また途上国の生産品を適正価格で購入するフェアトレードにも注目。ガーナ産の「フェアトレードカカオ」と「徳川はちみつ」を使ったアイスクリーム「幸せのはちみつカカオ」を共同開発しました。これも売上金の一部がガーナ支援に役立てられます。ESD ユネスコ世界会議でも共催イベントでブース出展しました。

生徒たちは養蜂を通じて自然環境を学び、商品開発で経済を学び、地域連携、被災地支援、フェアトレードなどにより社会を学びます。そしてそれぞれの現実や課題を理解し、相手の立場を考え行動することで社会の持続が可能になることを学んでいます。

## 多様性と向き合うことで 新しい学びのスタイルが育ってきました

ESDの特徴は子供から大人まで、学校から地域まで、多様な主体が学び合うことです。底流にあるのは1972年にストックホルムで開かれた国連人間環境会議です。地球環境の破壊の進行に対し、113カ国が参加して対応を協議した最初の国際会議です。従来の環境教育というのは、個人の欲望を抑える心構えが中心でした。しかし地球規模の環境破壊に、それではもう対応できません。そのための新しい価値観を育む教育がESDです。

例えば人間と自然との共存にしても、開発を

終えた先進国と開発段階の途上国では立場が違ってきます。違いの背景にあるものを理解し合い、折り合いを見出すことが第一歩です。原発問題もそうです。対立する両派の考えの背景にあるものを理解し合うことが大切です。国連ESDの10年で、異なる立場の対話が生まれてきたと思います。環境、経済、社会を持続可能な社会づくりという総合的な視点でとらえる、新しい学びのスタイルが育ってきました。国連が間に入り、それが世界規模のムーブメントになっています。

中部大学 中部高等学術研究所 准教授  
中部ESD拠点 事務局長  
ふるさわ れいた  
古澤 礼太さん

